

鋭意作成中なので活を入れるために公開します

「やあよ、おれ今日はもう仕事じまいなの。ザックンは閉店しました。だって世の中祝日だもんね。これからおれゴンガガ伝統カエルカレーつくんの。袋詰めにした何十匹って冷凍ガエルがおれを待ってるのよ。いまごろ溶けていい感じじゃない？ 罪なきカエルをわれ捌き給う。あ、きみ手伝いに来る？」

相手はそそくさと電話を切った。悪いやつではないのだが、ちょっとしつこい男なのだ。曰く、彼は「クリスマスにおけるミッドガルひとり暮らし男性を救済する会」を主催しており、要するに、大都市ミッドガルにおいて家族から遠く離れてひとり寂しく勉強や職務にはげむ単身者男性が集まって、家族のように団結し痛飲し愉快にやろうではないか、という会なのだ。本来は無害な会らしいのだが、二年前に、酔っぱらった勢いで道行く女性に手当たり次第に声をかけるといふバカな真似をする男が出て、通報され、手入れに遭うという手痛い経験をした。通報した女性は、自分が性産業従事者と間違われたというので怒り狂っており、駆けつけた憲兵にありとあらゆることを吹きこんだら

しく、憲兵たちはテロリストのアジトにでも乗りこむかのごとく武装して突入してきたのだった。

実際、クリスマス華やかかなりしミッドガルの陰では、街を警備する治安維持部隊の兵士たちの緊張は頂点に達している。この時期には毎年多くのチャリテイイベントが開催されるが、神羅の重役の出席するイベントには、必ずといっていいほど爆破予告やら殺害予告やらが舞いこんでくるからだ。たいていはいたずらにすぎないが、だからといって警戒をゆるめるわけにはいかない。特に、レジデント神羅やその息子のルーファウス神羅が出席するとなると、警備を担当する兵士たちは、その後三日もぶっ倒れて眠りこむほど神経を使わなければならない。

とはいえ、ザックス・フェア氏は治安維持部隊の間ではないし、いまのところどこからも援助を請われてはいない。つまり彼のクリスマスはうるわしき自由に彩られ守られているのであり、午前うちに早々に仕事を切りあげて帰宅したところで誰も文句は云えないのだ。

だがクラウド・ストライフはそうはいかなかった：
：フェア氏は愛車を転がしながら、二週間前、クラウドにさんざん文句を云われたことを思いだしていた。クラウドは清く正しい治安維持第十七部隊員であったから、クリスマスはもちろん書き入れ時であり、当然勤務表に名前が載っていた。クラウドいわく、この十二月になってからそれを変更してくれと云うことは、自分のような新米にとっては許されざることであり、これでおそらくクラウド・ストライフは、養成学校に続いてこの治安維持部隊においても村八分の目に遭うであろう。

クラウド・ストライフは今年の八月、めでたく神羅軍の養成学校を卒業した。十三歳から十五歳までのひよっこ少年兵たちを預かる養成校は、幼年学校とも「保育園」とも呼ばれ、二年間の在籍期間を経て正式な兵科に配属されるための予備学校である。卒業後の配属先はおおむね本人の希望が通るようになっていくが、ソルジャー志望であったクラウド・ストライフは、卒業直前に十六歳の誕生日を迎え、受験資格を満たした

ので、ソルジャーになるための適性試験を受けた。そして落ちた。クラウド・ストライフはこの世の終わりが来たかというほど落ちこみ、卒業式にも出ず、配属先の希望を出すどころの話でなかった。残酷なことだが、このような目に遭う少年兵はクラウド・ストライフが最初でも最後でもなく、たいていは次の配属希望先が見つかるまで、自動的に治安維持部隊に入れられる。もつとも人手不足の深刻なところだからだ。そこからなにか新しい適性を考えつければそれでよし、軍人をやめるならそれもそれだというわけである。

だが試験に落ちたあとのクラウドはほんとうにひどかった。精神的にかなり不安定になって、ザックスをはらはらさせ、セフィロスをうろたえさせた。いらいらしたり、沈んだり、つつけんどんだったり噛みつくようだったりするクラウドを、ザックスはこのあいだまで自宅で預かり、毎日仕事に送り出してやっていた。セフィロスと一緒にしておく、ふたりとも崩壊してしまいうさだだったからだ。

セフィロスほどの男になると、どんなに真剣なとき

でも、思いつめたときでも、どこかまだ余裕を残しているという印象を与えるが、クラウド・ストライフと来た日には、いったん思いつめるとなったら、世の果てまで行きついて、崖のふちのふちに立たないと、自分分は思いつめているのだと自分に云いきかせることもできないような人間なのだ。こういう人間が挫折の極みに達しているときに、セフィロスのような人間がよりによって当事者としてそばにいるのはたまらない。クラウドはどうしたって彼から離れなければならなかった。それに、セフィロスのようになるのだという夢が指先からこぼれ落ちたとき、クラウドはそのこぼれ落ちた夢であるセフィロス、自分の知っているセフィロスから、ほんとうの意味で引きはがさなければならなかった。

これがどれだけ困難な作業であるか、ザックスにはわかるような気がした。もちろん、ザックスはクラウド・ストライフなんかより、もつとずつとのんきな人種だ。セフィロスにあこがれたと云ったって、ザックスはセフィロスと自分があくまで別ものだとわかって

いる。できることはできるし、できないことはできないと割りきることもできる。でもクラウドはそういうタイプではなかった。なるとなったら、なりきらねば気のすまない子だった。セフィロスになると決めたのだから、セフィロスのすべてを自分の血肉としなければ満足しない。だが現実には冷酷だった。それはクラウドの夢を破り、希望を無残に引き裂いた。立ちなおすには時間が必要だった。ザックスはクラウドを引きとり、不安定で危険な数か月をなんとかやりすごした。クラウドはようやく二週間ほど前、急に「おれ帰る」と云いだして、セフィロスのところへ戻ったばかりだった。

それでザックスはこのクリスマスを、彼らの和解と新しい出発に捧げる、ひとつの儀式にしようと考えていた。といって、別ににか神秘めいたことをするわけではない。ただ一緒に食事を作り、食べ、飲んで、くだらないことやくだらないことを話しあうのだ。クラウドはひとつの危機を迎え、まだようやくそれを半分乗り越えたばかりだ。それにセフィロスもセフィ

ロスで、自分の身のふり方という未解決の大きな問題を抱えていた。たぶん、クラウドがソルジャー試験に落ちたいま、セフィロスもまた考えねばならないだろう。ふたりとも、またとても大きなものを越えていかなくてはならないだろう。それがどれほど大きいか、どれほどの困難が待ち受けているかは、まだちつとも予測がつかないにしても。ザックスとしては、彼らにながあつても、いつまでもできるだけ愉快にやっついてほしかった。そのためにできることなら、なんだつてしてやりたいと思っていた。

フェア氏の愛車が伍番街の高級住宅街にあるマンションに着いたのは、もうすぐ正午になろうかという時分だった。フェア氏は地下にある駐車場へ愛車を転がしていき、数分後には、食材のつまった大きな木箱を掲げもつてセフィロス氏の自宅の玄関に現れた。そしてさつそく台所へ木箱を運びこんで、腕まくりをはじめた。

「ジャガイモの皮は剥いておいた」

セフィロスが、台所の床に置かれた、大きな桶いっぱいジャガイモを指さして云った。

「あらー、ありがとボス、ボクうれい、愛してるわ」

ザックスは感激して手を握りあわせた。

「おれの揚げじゃが、いつできんの？」

クラウドがソファからとことこやってきた。

「一番最後だつつのバーカ。おまえ自分で食うぶん皮むけよ」

「なんで？ そこにいつぱいあるだろ」

クラウドは不満げに桶を指さした。

「これはおれとボスのぶんの揚げじゃがと、マッシュポテトと、その他諸々用なの。おまえのぶんは別なの」

クラウドはぶつぶつ文句を云いながら、木箱の中身をかき回しはじめた。

クリスマスのこのよき日に先だつて、ザックスは今回の会食を、ゴンガガならびにニブルヘイムの郷土料理舞いおどる酒池肉林とするるため、二週間ほど準備にいそしんできた。地方食材を仕入れ、セフィロス氏の自宅へ運びこみ、下ごしらえの必要なものはその都

度下処理をして冷凍していくという、根気のいる作業をひとつずつ進めてきた。カエル數十匹の解剖はさすがにしなかったが、冷凍品を買いこんで、小麦粉やスパイスをまぶして漬けこんである。クラウドの愛する羊肉のシチューは、クラウドの母さんのレシピ通りに作るとすると、暖炉の上に鍋を何日もかけておかななくてはならなかったので、ザックスはひとまず自宅で煮こんでおき、今日は仕上げればいいだけにしてあった。ニブルヘイムのおそろべき塩漬けたらにいたっては、塩抜きに数日を要するため、セフィロスに頼んで桶に水をはってタラをつっこみ、定期的に水をとりかえてもらわなくてはならなかった。伝統的な料理は、手間も暇もかかる。

ザックスはかつて、十四歳のころ、みずからの進路について兵士になるか料理人になるかで迷った男である。両親は、当然ながら息子が料理人になることを希望した。ひとり息子だったし、親として兵士などという危険極まりない職業に反対するのは当たり前だったが、ザックスはそれでも兵士になる道を選んだ。高給

取りだし、料理人よりは早くひとり立ちできると考えたのだ。料理の世界では、十四で弟子入りしたとして、両親に仕送りしてみずからも生計を立てられるようになるまでに、まあ十年はかかるであろうが、兵士であれば、養成校を出てすぐにそれなりの給料が見こめるし、なによりセフィロスのようになることができるかもしれない。ザックスがそんな期待を胸にミッドガルへ出てきたとき、同じようなことを考えて田舎から出てきた少年はほかにも大勢いた。ソルジャーという存在は、まだ世に出て間もなかった。セフィロスという少年兵の存在が話題になりはじめたのは、そのたった一年か二年前のことだ。誰もソルジャーというのがどんなもので、なにができるのか、よくわかっていなかった。神羅カンパニーだつてよくはわかっていなかった。ザックスは、その未知の可能性にもなにか魅力を感じたのだ。たぶん、うまくいけば、二十歳そこそこで指揮官になり、途方もない給料をもらったり、名譽を身に受けたりすることだつてできるかもしれないではないか？

「おれも若かったのよ」

ザックスは母ちゃん直伝ゴンガ伝統のカエルカレーの食材を切りながら云った。ザックスの母ちゃん曰く、カエルカレーには、フルーツを蒸留して作った地酒をちよつと入れるのがコツだった。

「あんたにあこがれて田舎から出てくるやつなんて、まあだいたいそんな夢膨らまして来るんじゃない？な、クラ坊」

クラ坊は踏み台に座って黙々とジャガイモの皮をむいていたが、顔を上げた。そしてテーブルに身をかがめて、サラダを彩りよく盛りつけることに命を懸けているらしいセフィロスを見た。セフィロスは画家かなにかのようにときどき身を引いて、全体のバランスを見極め、またかがみこんで、なぜこのイクラという愚か者はおれの意図に反してずり落ちてくるのだろうかとも云いたげに、ころころ転がりまわる魚卵を根気よく移動させたりしていた。

「でもさ、ザックスの場合は、戦争行つて、間近でこの人のこと見てたからまだいいよ。おれくらいのはつ

なんか、さんざんテレビでこの人のいろんな映像見せられて、あおられてミッドガル来たのはいいけど、戦争は終わってるし、本人は出てこないし、なんていうの？ むなしさ？ とホームシックのダブルパンチ食らって、とつとと田舎帰ったやつ、けつこういた。最初の半年で、たぶん三分の一は消えたもん」

「昔からそんなもんだったよ」

ザックスは地酒を鍋に入れるついでにひと口失敬して、んまい、と満足げに云った。

「だいたい、ソルジャー試験受けられるようになるまで軍のいじめ体質に耐えぬいて残ろうなんて骨のあるやつ、半分いりゃいいほうっしょ。試験受けて運よくソルジャーになったってさ、そこから先がまた長いんだ。まあおれんときは、いまとちよつと状況違ったけどね。そもそも人材少なかったから」

「あのころはまだよかった」

セフィロスが急に話しはじめた。

「わが副官殿がソルジャーに昇格したころは。おれの責任もいまに比べれば紙のように薄かった。考えるべ

きことも多くはなかった、いまのようには……いまでは、あまりに多くの人間がこの分野にやってきたせいで、ありとあらゆるやつがいる。たびたび頭をおち抜いて処刑したくなるような男もいる。誰とは云わないが……」

「あーあ、おれ誰かわかつちやった」

ザックスがその人物を思い出したとでもいうように、うんざりした声で云った。クラウドはまたジャガイモの皮むきに戻った。

「おれがファーストの進級になんの καν のと難癖をつけていつまでも寡頭政治体制にしておくのはそのせいだ。いざというとき自分が責任をもちたくないやつはそばに置かない。専制政治と云いたいやつは云えばいい。その手のストレスを常時抱えているくらいなら、ファーストとののしられたほうがましだ。もっとも、おれがいなくなったらどうなるのかは知らないが」

セフィロスがこんな話をするのは珍しかった。彼は自分の立場や自分をとり巻く状況についてどう思っているのか、なかなか明かそうとはしない。というより、

たぶん彼がそういう話を安心してすることができるのは、ザックス・フェア氏の前でだけだろう。それ以外の関係のなかでは、セフィロスの発言は常に公であり政治だった。ソルジャーの仲間うちで冗談を飛ばすときでさえ、彼は踏みはずさないように気をつけていた。

それが習い性になってしまっていたので、はじめセフィロスは、クラウドになにを話してもよく、なにを話すのはよくないかの見きわめに苦労していたくらいだった。結局、その壁をおち破ったのは怒りに満ちたクラウドの一撃だった。

「ボスがいなくなったら、おれだって知らね。そうなったら、なんかどうでもよくなりそう、おれ。燃えなくて、田舎帰っちゃうかも。んで、しばらくしたら、またどっかちよつと開けたとこ出てき、バルかなんか開いてさ、毎日客と一緒に飲んだくれんの」

「揚げじゃが出る？」

クラウドがイモをむきながら訊いた。

「おれイモの皮むきのバイトくらいだったらしてやってもいいよ、揚げじゃが出るんなら。あと皿洗い」

「おまえに飲食商売ができるとは思えないんだよね、おれは」

ザックスは疑わしげにクラウドを見た。大量のジャガイモが茹であがり、ザックスは用途別によりわけはじめた。

「おまえには向いていないと思う」

セフィロスも云った。セフィロスはようやくいまましいイクラやサーモンとの戦いを終えて、今度はチーズやマリネやオリーブなどの芸術的盛りつけに熱意を傾けはじめた。

「おまえほどサービス精神のない子も珍しい」

「だってどうでもいいだろ」

クラウドは唇をとんがらせて云った。

「他人のことなんか。マッシュポテトできた？ おれ味見する」

ザックスは小さな皿にのっけて、食いざかりの坊主に出してやった。ザックスはたいへん美味なマッシュポテトを作る……すぐくたくさんのバターと、ジャガイモの皮をひたして香りを移した牛乳で。

彼らの今年のクリスマスはそんなふうにはじまった。

三人で一緒に過ごそうなどは、ザックスが云い出さなかったら誰も思いつかなかっただろう。そしてこれは、セフィロスにとってもクラウドにとっても、なかなかいいアイディアに思われた。クラウドは田舎から出てきてからというもの、クリスマスシーズンになると、ニブルの母さんを思いだしてしまつてなかなかやりきれない気持ちになるのだが、去年は、セフィロスといるとそのやりきれなさが解消されるどころか、よけいひどくなってしまふらしいことに気がついた。たぶん、セフィロスがクラウドの感傷に優しすぎるせいだ。それでクラウドはついいらいらしてしまい、いらいらした自分にあとから落ちこんで、とにかく散々だった。おまけにケーキをホールで食べるなどというばかな真似をしたせいで、夜中に気持ちわるくなつたりした。ベッドのなかで気持ちわるさにうめきながら、もう来年は絶対にクリスマスなんかしないと心から誓つたくらいだ。でもザックスがいるのだったら、クラ

ウドは落ちこまないですむ。ザックスはセフィロスではないし、クラウドの気分を甘やかしたりしないからだ。

食卓はいまや簡易的な世界地図に見立てられ、南ブロックにゴンガガのカエルカレーや、すっぱいサラダや、スパイスがたっぷりかかった豆と野菜の煮こみなどが並び、北ブロックに、ザックスがはじめて挑戦したクラウドの母さん直伝ニブルの羊肉のシチューや、タラの干物料理や、塩ぬきした塩漬けダラとマッシュポテトのディップなどが並べられた。そしてそれらの周囲に、ミッドガル人セフィロスのために、ミッドガルでクリスマス定番になっている鶏の丸焼き、サラダ、オードブル等々がちりばめられた。

ザックスは大いに痛飲すべく、ゴンガガとニブルヘイムの地酒をたくさんとり寄せていた。クラウドのよく知っている、ニブルの男たちが炉端でちびちびやるジャガイモとスパイスで作った蒸留酒の瓶もある。スパイスの調合で、いろいろな種類があるのだ。この酒を母さんもときどきちびちびやっていた。料理をこしら

えながらときどき……けっこうたまに。クラウドは昔母さんに隠れてこっそり飲んでみたことがあるが、とてもまずくて変なおいがし、飲めたものではなかった。そのときに、クラウド・ストライフは一生涯酒を飲まないことを誓ったのだ。

「いやいや、はじめて飲んだけど、このニブルのジャガイモ酒、うまいよ」

ザックスは瓶を持ち上げてしげしげと眺めながら云った。

「貧困の味だよ、おれに云わせりゃね」

クラウドは自分用の大きな鉢に盛られた揚げじゃがを満足そうに食べながら云った。

「食い物がジャガイモと、ぶちのめした羊と、チーズと、獲れてから一年もたったタラくらいしかないんだもん。あと干からびた豆」

「厳しそうだもんね、おまえんとこの土地。おれ北国に定住しようと思った人のこと尊敬しちゃうな……でもゴンガガだってやあよ。高温多湿、ものはずぐ腐る、作物はカビにやられやすいし、水害に遭いやすい。い

やゝな虫とかいっばいいるしね。油断すると人さまの皮膚に卵産んだりしてさ……」

「おれぜつたいやだ、ジャングルのそばに住むの。でつかい蚊がいるし、そもそも虫が全部でかいし」

「虫天国なのは否定しねえかな。でもおれたちはさあ、うるわしい故郷つてのがあるけど、セフィロスはどこに住みたい？ それかどこに行きたい？」

セフィロスはジャガイモ酒を味わいながら考えこんだ。

「なんだか、たいていのところに行ったことがある気がするんだが」

セフィロスは考え考え、微笑んだ。

「どこもそれぞれに魅力的だった気がする。個人的には木があつて、川が流れているところが好きなんだが」

「おれ頑張つて川のある土地買つてもいいけど、そして水車小屋建てていい？ 好きなんだ、水車。それで毎日粉ひいて、パン食べ放題にしてやるんだ」

ニブルヘイムの貧困と乏しい食料の中で育つたクラウド・ストライフは、夢を見るような顔で云つた。

「水車小屋には悪魔が住んでいる」

セフィロスはおどすように声を潜めた。

「おまえがさらわれないように見張つていよう。それにおれは悪魔と仲良くやれそんな気がしているんだ、昔から」

「悪魔も逃げだすと思う、クラ坊の食い気見たら」

セフィロスもザックスも、そのような少年時代を経してきたこともあり、クラウドの牛馬級の食欲を見ても少しも驚かないが、上品なご婦人あたりが見たら腰をぬかすだろう。大鉢いっばいの揚げじゃがと、テーブルを埋めつくす料理の数々を食したのちに、なおケーキを食べフルーツをつまもうというような食欲を、クラウドの母さんひとりに背負わせなくて幸いだったと云わねばならない。ニブルヘイムの痩せ枯れた土地と冷涼な気候では、こんな少年を養うのは困難である。せつかくなので、めいめいにひとつ郷土料理にまつわるお話を披露してほしいとセフィロスが云つた。ザックスとクラウドはじゃんけんし、ザックスが勝つたので、クラウドから話しはじめることになった。

「別に改めて話すようなことなんにもないんだけど」
クラウドは唇をとがらせて云った。

「なんにもないってことはないっしょ。クリスマスにいつもなに食ってたとかさ、特定の日だけ食える料理があったとかさ」

「そりゃね、クリスマスのは、ちょっとだけシチューの中の肉の割合が多かったよ。隣んちのじいさんは、羊のキントマ食べてた」

セフィロスがフォークをとり落した。

「すごく変な味がするんだ。発酵してて、すっぱくて、臭いんだ。でも隣んちのじいさんは、それを食うとまた一年元気でいられるんだって云ってた。元氣って、どういう意味っておれ訊かなかった。やな予感したから」

「……それ、どういう形状で出てくんのか、一応訊いていい？」

ザックスがすごい顔で訊いた。かつての料理人希望であり、自称全世界を股にかけた食の伝道師ザックス・フェア氏としては、いつかそれを食さねばならぬと早

くも覚悟を決めているようにも見えた。

「スライスしてあるんだ。こんな感じで」

クラウドは揚げじゃがのひとつを皿にとり、ナイフで斜めに切りわけはじめた。聴衆の顔が青ざめた。

「羊のキントマって、けっこうでかいんだよ。一頭分食えりや立派なもんだぞ坊主って、じいさん云ってた。

スライスされたキントマに、ゆでたジャガイモと、豆の煮こみがついてた。それとパン食べるのが、じいさんのクリスマス食事なんだって。でも連れのばあさんは、普通にソーセージ食べてた。おれ、ソーセージがあんなにうまいってこと、はじめて知ったんだ、その日」

セフィロスは気が遠くなったような顔をしていたが、ザックスが揺さぶると、意識をとりもどした。

「おまえがとてもたくましい精神を持っている理由がわかったような気がする」

セフィロスはげっそりして云った。

「そんなものまで食して生きのびてきた土地の子が、たくましくないわけはない」

「クリスマスに毎年顔出してのクラブのイベント、今年も覗いとうかかって思ってるの」

セフィロスに今夜はなにをするのか訊かれて、ザックスは云った。

「クラ坊、年明けは一日が休みなんだっけ？」

玄関まで見送りに来たセフィロスに、ザックスは訊いた。

「そうらしい。変則労働も深夜勤務もできないので、未成年は割に合わないとおつおつ云っていた」

「あいつ、まだ未成年なんだよなあ……」

ザックスは天を仰いで云った。

「副官殿はなにを考えているんだ？」

セフィロスがからかうように訊ねた。

「んー……なんか、おれも十六なときあったけど、おれの十六って、人生で一番うきうきだったんだよね。」

ほら、あのころのソルジャー試験規定って、いまよりめっちゃくちや緩かったじゃん？ おれなんか試験受けたの十五なときだし、そもそもそのころって、受かるも落ちるもないみたいな感じでさ。あれ完全に人体実

験だったよなあ……魔人になるのが続出してさ、ゼーくんぶ後決めだったじゃん、いろんなこと。そうやって、危険たっぷりだけとにかくやっちゃえみたいなのと、いまみたいになんか基準があつてふるいにかけれらんのと、どっちが幸せかなあつて思つて、たまに考えちゃうの」

セフィロスはうなずいた。

「……どうすんのかなあ、クラちゃん、この先。あいつときどき、もう燃えつきて年寄りになったみたいな顔してるときあつて、おれびっくりすんのよ……しつかりしろよおまえ、まだ十六年しか生きてねえんだぞつて云つてやりたいんだけど、余計なお世話だよな、これ、きつと」

「熱量の問題で云えば、倍くらい生きてただけ燃えたのかもしれないしな、実際」

セフィロスは記憶を追いかけるような目をした。

「人間が生きているのは時間ではない、どう見てもこの何か月か、あの子がこのまま死ぬかもしれないと思つてた。あれはそういう子だとわかつてた……」

一瞬間、強烈にきらめいて、すぐに燃えつきてしまう……そういうタイプが確かにいる。そうした人種にとって、生き延びることが幸福なのかどうか、おれにはわからない。もしかすると地獄かもしれない。でもともかくあの子はまだ生きています。まだ生きています。ということは、少しは先を考えるつもりがあるんだろう。見つかるかどうかは別にして」

「川の流れる土地買う金貯めるくらいまでは、生きるかもね。おれ、なんかむやみに感動しちゃったんだ、さつきクラウドがそう云ったとき。……なんか、ほんと、世話の焼けるやつだよ、あいつ。今度本気でぶっ飛ばしてやる。目覚ましたらそう云つて」と

ザックスは安堵のあまり怒ったようになりながらセフィロスの家を出ていった。そして、セフィロスもクラウド・ストライフもザックス・フェアもみんなばかやろうだと思いつながら、なじみのクラブへ向けて愛車を転がした。

フェア氏が去ったあと、ソファに寝ていたクラウド

の横に座ったセフィロス氏は、いつもクリスマスに読むことにしている断想集を開いて、読みはじめた。断想はいくつかの章にわかれている。愛、怒り、悲しみ、魂、そして神。クリスマスほど、神を考えるによい日はない。人とこの世のあり方、それに人類の救いについても。機関銃や飛行機がついに戦争に導入されはじめた激動の時代に従軍したこの思想家は、人類の行く末を深い憂いをもって見つめている。日々死体が積み重なる戦場において、神はどこにいますと考えるべきか。これほど大量の同胞を死に至らしめることのできる人間とは、いったいかなる存在であるか。いまひとり同胞を殺すことは、明日の自分を殺すことではなからうか。その問いを胸に抱いて、自分はこれから先を生きられるかどうか。そして自分の生きるその世界は、どこへ向かおうとしているのか。

セフィロスが戦場に送られるようになったとき、すでに神羅カンパニーはありとあらゆる武器や移動手段を開発し戦争に導入していた。空を自在に飛ぶ戦闘機があり、自動小銃があり、大砲をぶちこまれてもびく

ともしない要塞のような戦車があった。それらの技術
を、終戦後は広く開放し、民間人の移動や生活をより
便利にするであろうと、当時の神羅カンパニーは喧伝
していたものである。われわれの目指す世界は便利で
ある。魔晄とともにある世界は豊かである。その世界
においては、もはや飢餓も貧困もなく、人は食料のた
めに土地にしがみつくのをやめ、果てしない労働か
ら解放され自由を手にするであろう……それはまさに
プレジデント神羅の理想であり、彼はそのため力づ
くで覇権を握ろうとしていた。いまは、ただ単に、そ
のため苦しい過渡期に過ぎないのだ、というのがプ
レジデントとその取り巻きの共通認識だった。この戦
争も、先の戦争も、なにもかも、輝かしい未来のため
に捧げられる犠牲である。

プレジデントは実際セフィロスにもそう云った。プ
レジデントが神羅製作所創業者一族の正式な嫡子では
なく、貧困と多産の中で人生を開始した人間だと、い
までは誰が知っているだろう。もしかしたら、知って
いる者はもう誰もいないかもしれない。なぜセフィロ

スがそれを知っているかは興味深い問題だ。なぜプレ
ジデント神羅はそれをセフィロスに隠さなかったか。
側近中の側近ですら知らないようなことを、実の息子
でさえ知らないようなことを、セフィロスだけは知っ
ているのはなぜか。セフィロスはその答えを知って
いるような気がする。そしてそれがプレジデントの思想
の限界でありセフィロスの領域への期待であることを、
知っているような気が。

隣に寝ていたクラウドが、もぞもぞ動きだした。

「……ザックス帰ったの？」

眠たげな、やや不満げな第一声はこれだった。

「おまえによろしくと云っていた。今度ぶっ飛ばして
やるそうだ」

「そしたら、ぶっ飛ばし返してやる」

クラウドはにんまり笑って、体を起こした。

「ケーキ食べた？ まだある？ あの緑色の箱の」

「食べていないしそのまま残っているが、今日はやめ
ておいたほうがいいんじゃないのか？ また夜中に気
持ちわるくなるかもしれない」

セフィロスはちよつとからかった。クラウドは唇をひん曲げて頭突きをくらわしてきた。セフィロスは笑った。クラウドはそのままセフィロスによりかかつて、おとなしくなった。心地よい沈黙が流れた。

「いま何時」

「もうすぐ八時になる」

「クリスマス終わっちゃうね。もうちよつとしたら、おれ母さんに電話しよう。それで、セーターのお礼云うんだ」

クラウドの母さんは、離れて暮らす息子のために、今年はセーターと、靴下と、帽子を編んで送つてよこした。クラウドは母さんに、ハンドクリームと、いい香りの石鹸とタオル、それに丈夫で温かい靴下を贈った。クラウドは荷物の中に、このあいだちよつぱり出した賞与をみんな入れてやったが、母さんが気を悪くしないかどうか、ちよつと心配だった。もしかしたら、こんなことをしないで、自分のためにとつときなさいと怒られるかもしれない。荷物をこしらえているとき、セフィロスにその話をしたら、セフィロスは、

怒ったほうが怒りんぼのクラウドの母さんらしくていいのではないかと云った。クラウドはそれもそうだと思つたので、お金をみんな入れたのだ。

「去年おまえが、来年はクリスマスなんかしないと云つたので、今年はなにもないかと思つた」

「……おれも。できないと思つた」

クラウドがうつむいた。セフィロスは体をひねつて、クラウドに顔を向け、ソファの背もたれに頬杖をついた。

「おまえが帰ってきてくれたのでおれはうれしい」

「あんたそれ前も云つたよ」

クラウドは赤くなつて、その赤くなった顔を隠すように膝を立てて丸まりながら、ぼそぼそ云つた。

「云えるときに云つておくさ。おまえのような子は、またいつどうなるかわからないんだから」

「まあね……情緒不安定つてのはなんとなく自覚ある……そういうの、自分でもどうなんだつて思うんだけど、どうにもならないんだもん……あの、いろいろご心配おかけしました」

「それも前に聞いたな」

「云えるときに云っとくんだよ」

クラウドはやりかえし、しまいにはふたりして笑い
だした。笑いが収まると、クラウドは急に真面目な顔
になった。

「あのさ、話したいことがあるんだけど」

セフィロスはうんとうなずいた。

「おれ……」

そのとき、急にクラウドの電話が間の抜けた音楽を
流しはじめたので、ふたりはちょっとびくつとなった。

「ザックスからだ……なんだよ、もう」

クラウドはぶつぶつ云いながら電話に出た。

「もしもし……なに？ 起きてたよ……横にいる……」

うん……わかった、いま代わる……」

クラウドは電話を差しだしてきた。

「おれだ。どうした？」

「あねボス、今日、プレジデントのおやつさんどこ
にいるか知ってる？」

ザックスの声は真剣だった。

「例年、クリスマスは壱番街の市立歌劇場で、オペラ
のチャリティーコンサートに出席しているはずだが」

「セーかい。あのね、いましがた、その市立歌劇場に、
巡回中の治安維持部隊の兵士がひとり乱入してきて、
プレジデントに銃向けようとしたらしい。もちろんす
ぐ射殺された。すげね……」

セフィロスはそれで？ と云った。

「そいつ、うちの兵士じゃなかった。ぜんぜん違うや
つだった。そこまでは百歩譲ってまあいいよ。問題は
こつから。市立歌劇場って壱番街七区だろ？ 第十七
部隊の担当だよ。クラウドのいる部隊。その射殺され
た二セ兵士さ、アントン・ベイリー二等兵って兵士に
なりかわってただけど、このアントン・ベイリー二
等兵って、今日クラウドが休む代わりに警備に入った
子なんだよね。十七歳だって。本人は行方不明でいま
探してる。四時の休憩終わりまでは確かにいたらしい
から、きつとそつからなんかあったんだわ。んで、十
字星同胞団が犯行声明を出してる。本社に動画が送ら
れてきた。いま送るわ。とりあえずそれ見て。その動

画に映ってるやつが射殺されたやつだから。おれとりあえず劇場向かってる。とにかく動画見て。んでどうすつか考えて」

ザックスは電話を切った。

「……ザックスはどうしたの？」

クラウドが怪訝そうな顔で訊いてきた。セフィロスはそれには答えず、ザックスから送られてきた動画を開いた。クラウドがのぞきこんできた。

画面に、青いターバンを頭に巻き、同じく青いローブのようなゆったりした上着を身につけた少年がアッブで映しだされた。ターバンからのぞく髪の毛は明るい金髪で、奇妙に表情のない据わった印象の目は、その印象とは正反対に真っ青な美しい色をしている。北方の血を引く白い肌、おそらくクラウドと同じ年ごろだ。少年が身につけているターバンの中央には、金糸で十字架の中心に五芒星を配したシンボルが刺繍されており、上着には同じく金糸で星がいくつもちりばめられている。

少年が静かに口を開き、こちらをまっすぐに見つめ

たまま話しはじめた。

「死、金、富、名誉を軽蔑する、新しい哲学者の学派が興る……五百年前のこの予言は真実である。そしてわれわれ十字星同胞団の予言者の予言も真実である。われわれはすでに三十年前、そのことを証明した。しかし度重なるわれわれの警告にもかかわらず、神羅カンパニーは魔晄炉の建設と魔晄エネルギーの使用をいままもって停止していない。われらが予言者の霊言の源、大いなる星の霊がこう云われる。

『あわれな人類よ、そなたたちが立ちあがらないなら、われらが母君の権能によって、われらはそなたらに悔い改めのための使者を遣わす。その使者は、世に平和でなく争いと剣をもたらす。剣に頼む者は、剣によって滅びる』

神羅カンパニー、ならびにその権力と支配の象徴である神羅軍よ、われわれは、死、金、富、名誉を軽蔑する、新しい哲学者の学派である。われらは死を軽蔑する、なぜならわれわれの希望は死のちに、母なる星へ還ることのうちにあるからである。われらは金、

富、名誉を軽蔑する、それはあなたたちの求めるものであり、この世のものでありむなしなものだからである。

われわれは今日、大いなる星の霊の命令によって、真の哲学者の集団であることに加えて真の兵士の集団となったことを宣言する。そしてあなたがたに宣戦を布告する。われわれは死を恐れず、力による制圧をものともしない。それは今日証明されるであろう。今日われわれはこの星に、星の救済に向けた一歩をしるす。

それは大いなる霊の命令であり、星の命令である。われわれはこの星の命令のもと、必ずや勝利をおさめるであろう。われわれの勝利とは、すなわち次のようなものである。

神羅カンパニーの最高責任者プレジデント神羅、ならびにその後継者であるルーファウス神羅、またその軍隊である神羅軍の兵士たち、わけてもソルジャー部隊とその最高司令官であるセフィロスの命をことごとく滅ぼすとき、われらの目的は達せられるであろう」

そして動画はぷつりと切れるように終わった。

「なにこれ」

クラウドは困惑した顔をしていた。

「こいつ、目イッチャってない？ 頭おかしいんじゃないの？」

「ある意味そうだろうな」

セフィロスは唇に手を当てて考えこんだ。

「しかもあんた、名指しで殺すって云われてる……十
字星同胞団ってなに？ 神羅となんの関係があんの？
っていうか、ザックスなんの話したの」

セフィロスは首をめぐらしてクラウドを見た。あの少年の目は確かに「イッチャって」いたし、クラウドには少しも似ていなかった。金髪碧眼という共通点があるだけ。そして同じ年ごろなだけだ。だが彼はクラウドの就いていたはずの巡回警備につき、クラウドが歩いていたはずの道歩き、おそらくはクラウドが通ったはずの劇場前を通った……そして突如として銃を構えて劇場に入りこみ、まっすぐに観客席のあいだを縫って、そして……

セフィロスは首を振った。どうするか考えろ……確

かにザックスとしては、それしか云えないだろう。ウータイ戦争の英雄セフィロスというのと、戦争が終わってからのというもの、もう二年近くも仕事をせず、責任と役割から逃げまわっている。最近はこのまま静かに引退するのもいいなどと思つてさえた……クラウドのソルジャー試験の結果によつては、もう神羅と縁を切つてやろうとさえ思つていた。ごちゃごちゃ云うやつは黙らせればいい。それくらいの力はあるのだからと。だがいまは？ この状況は？ なにが起きている？ なにをしなければならぬ？ なにを求められている？ 考えろ、考えろ………

「……あんた、大丈夫？」

クラウドが心配そうな顔でセフィロスの顔をのぞきこんでいる。

「ザックス、なに云つたの、ほんと、なにがあつたの？ なんかもまずいこと？」

クラウドの疑問と不安だらけの顔を見たとき、セフィロスの口は考えるより先に答えを与えるべく動いていた。

「市立歌劇場でプレジデントを襲撃しようとしたやつがいる。すぐに射殺されたそうだが、さっきの動画はいわばその犯行声明といったところだろう。ザックスがいま劇場に向かっているが、悲しいことにおれもおまえも無関係じゃない。詳しくは道々話そう。長い話になるんだが。それに……まったく、今日は厄日なのか？ こんなクリスマスがあるか？ おれは最悪の気分のだん底で、おまえに見せたいものがある、駐車場に行こうと云わなくてはならないのか？」

「……ごめん、なんの話？」

「いいからとにかく出かける支度だ。ああ、今日という日は呪われる！ あるいは門出を祝うべきなのか？ ザックスに電話して、いまから行くと云つてくれ」